2015 4/14
No.1992
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

県内有数の桜の名所・大和市福田の引地川沿いの千本桜が見ごろを迎えた（２日撮影）。県は来年度から治水対策で川幅を広げるため、すべての桜を伐採する。工事も伐採も毎年数十㍍ずつ、２０年ほどかけて進め、新たに桜を植えるという。

神奈川新聞社

政経かながわ

2015 4/14 No.1992

contents

視点・点描 3
戸塚大踏切ついに閉鎖

講演録 4
「クラウドソーシングでビジネスはこう変わる」
株式会社クラウドワークス代表取締役社長兼CEO
吉田　浩一郎

国　際 8
イエメン内戦、地域戦争に発展
アラブ諸国の米国離れ加速

経　済 10
ＡＩＩＢ設立、中国にも試練
米国参加で日本孤立も

企業最前線 12
食品の遺物混入防止で新技術
「食品防御」分野も活発化

くらし2015 14
不整脈発見で脳梗塞予防を

広告珍談 16
うまい物もろもろ⑪
朝、飲むもの！

NNAアジア経済リポート 17

会員のページ 18
設立50周年は来年４月に（その10）役員③
会員の動き

会員のページ 19
設立50周年は来年４月に（その10）役員③

事務局だより

◇横浜定例講演会
2015年5月13日（水）
13時30分～15時
ホテルキャメロットジャパン
５階「ジュビリー」
講師は共同通信社客員論説委員、星槎大学客員教授の
佐々木　伸　氏
演題は「日本人がテロの標的に　世界を揺るがすイスラム国の脅威」(仮題)

視点点描

戸塚大踏切ついに閉鎖

作業員が通行止めの標識を設置して通路を閉鎖すると警報機が鳴りやんだ。…閉鎖の瞬間には拍手を送って最後を見届けた―。

ラッシュ時には1時間のうち3分しか開かない〝開かずの踏切〟として知られたJR戸塚駅北側の「戸塚大踏切」が、3月25日ついに廃止された。代わりにアンダーパス（地下車道）が開通。一足先にできた歩道橋と併せ、交通のネックが解消された。

冒頭は、市民ら数百人が集まった渡り納めの様子を報じた神奈川新聞の記事。どこからか「蛍の光」の音楽も流れたという。不便でしようがない踏切だったが、長い間市民を守ってきた存在でもある。惜別の思いを持つのは、歴史的建造物などに比べてもそんなに変わらないのかもしれない。

踏切との付き合い方は人それぞれ。地元有志によって同日発行された「戸塚踏切新聞」には昔を振り返る懐かしい話が満載だ。

「列車の下をくぐったり、駅員さんに改札を通らせてもらったり、こだま号を見に行ったり、踏切の周りは冒険の場所だった」「待たされるのが嫌になった時が子ども時代の終わりだったかもしれない」。迷惑ばかりではない。大人と違った視点が面白い。

同踏切の存在が広く知られるようになったのは、吉田茂元首相のおかげでもある。大磯の自宅から国会・官邸へ通う道中、なかなか上がらない遮断機に業を煮やし、ついには1953（昭和28）年、踏切を通らない、世に言う「ワンマン道路」を通させたのは、あまりにも有名な話だが、足止めを食らった元首相が、前後を車でガードされた車の中でイライラしているのが、子どもながらに分かった―という目撃談も。

そのワンマン道路ができるまでは、箱根駅伝でせっかく快走を続けた選手が大踏切で足踏み、というケースがしばしば起きた。「選手が大踏切で止まって待っていたら、踏切番のおじいさんが電車が来ないのを見計らって選手を通していた」のだそうだ。アスリートにとっての不運が解消できたのは、ワンマン道路の効用の一つともいえる。

踏切閉鎖は、同駅周辺の再開発に合わせての10年がかりの事業の一環だ。これで、長い間東西に分断されてきた地域はつながったのか。警報機の音が消え、大踏切は〝記憶〟の存在になった。真の一体化へまちづくりが始まる。

（神奈川新聞社編集委員　春名　義弘）

広告珍談　うまい物もろもろ⑪

宮野　力哉

朝、飲むもの！

幼いころ京都市内に住んでいたボクは、父親に連れられて円山公園に行くのが楽しみだった。公園に《パンと乳》の看板をだす茶店があり、赤いモーセンが掛けられた床几にすわって、「パンと乳」で朝食になった。

牛肉をはじめて食ったのはすき焼き屋だろうけど、牛乳は公園。それも朝であった。いまほど冷蔵庫が進歩してないころ、牛乳は朝、飲むものときまっていた（わが家だけかな）。

『馬酔木』や『アララギ』を発刊した歌人・伊藤左千夫は、「保存して置くことが出来ない品物、即ち牛乳などは困難をする」と書くほど、牛乳はやっかいな飲み物だった。

1874（明治7）年5月、『新聞雑誌』という新聞にこんな広告が出た。「牛乳の効用は能く人の微知する処にして、近時牛乳舗を開くもの日一日より盛なりと雖とも、其価甚だ貴くして中人以下の能く償ふに堪ざる所なり。弊舗這般米国より数頭の牛を舶載して、しかも其乳精良なり。価も他に販売するより廉直なれば、四方の雅君、恵顧あるか又一書の郵便を以てあつらへ玉はゞ、時間を違へずもたせ差出し申べし」。

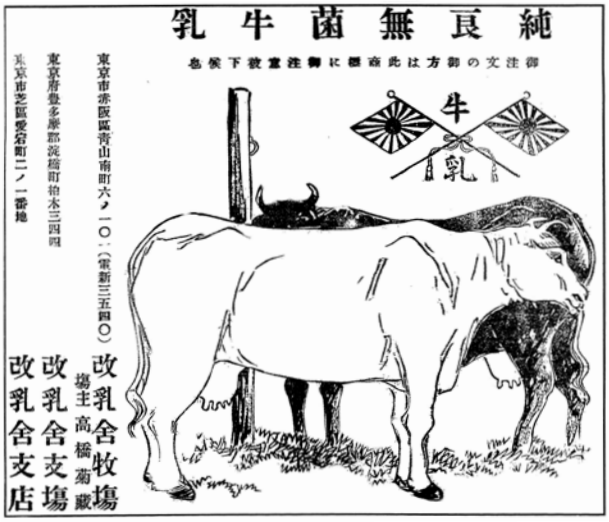
東京の千里軒という店。牛乳はカラダにいいと近ごろ、牛乳屋が多くなったが、高価で裕福でないと買えない。当方はアメリカから輸入した牛だから、安くて新鮮な牛乳である。1合（180cc）は4銭、午前6時と午後4時に配達すると。

牛乳の値段は、明治元（1968）年の12銭からだんだん下がって、明治8年5銭。12年4銭、16年3・5銭、20年3銭。円山公園に行った昭和13年ころ、8銭であった。食パンは1斤（450g）が明治7年6・5銭、だんだん下がって15年6銭、20年5銭、昭和14年ころ18銭であった。1斤も食べないから、半分として9銭。牛乳ともで17銭。そのころ京都の市電は10銭、いま京都のバスは220円。はて、《パンと乳》は高いか安いか。

この広告は牛乳4銭、食パン10銭ころに掲載された。「純良無菌牛乳」と右書き（文字を右から左に書くこと）。注文はこの商標でというマークは、2本の軍艦旗（日本の軍艦が艦尾に掲揚する16条の旭日旗）。日露戦争前で、強がってる雰囲気をかんじさせる。

2頭の乳牛は洋画家だろうか、みごとなイラストではないか。それにしても牧場は、東京市赤阪区青山とある。あのしゃれた青山で、乳しぼりをしていたという。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）



（図）「純良無菌牛乳」の広告・明治36年5月12日、時事新報掲載